The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	複合実体と「エコー」：〈実体的紐帯〉を巡る一考察
Author(s)	山口，裕人
Citation	メタフュシカ. 2006, 37, p. 41-54
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/8269
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

複合実体と「エコー」――〈実体的紐帯〉を巡る一考察

山口裕人

初めに

ライプニッツは、晩年の 10 年間（1706 ～ 1716）にイエズス会のバルトロマイウス・デ・ボス神父 Bartholomew des Bosses と交わした膨大な書簡集に於いて、諸実体乃至モナドの集合体である物体に実体性を付与し複合実体と成すものとして〈実体的紐帯〉vinculum substantiale なる概念を提示した（1712 年 2 月 5 日付書簡 ; GII, p.435）が、これに納得しないデ・ボス神父に対して、1715 年 4 月 29 日付の書簡に於いて、ライプニッツは「エコー」Echo という言葉を用いて説明を試みる（ibid., p.495）。以後この言葉は〈実体的紐帯〉を語る際に幾度か用いられることになるのだが、果たしてこの言葉は研究者たち[1]が述べるように使用意図の良く分からない比喩に過ぎないのであろうか？　本稿では、彼らの遣り取りの最後を締め括る 1716 年 5 月 29 日付書簡でのライプニッツの言葉、「魂も外的なもののエコーである」（ibid., p.517）を手掛かりに、この言葉を以て彼が〈実体的紐帯〉について提示しようとした事柄を明らかにすることで、「エコー」という言葉が単なる比喩に留まるものではないことを示したい。

'Echo' を有する実体的紐帯

さて、本往復書簡で「エコー」という言葉が〈実体的紐帯〉と絡む形で初めて登場するのは、現象を実体化する、即ち諸モナドの寄せ集めを複合実体と成すような実在的結合が在るとするなら、物体そのものに変化をもたらすのは何であるのか、というデ・ボス神父の問いに対するライプニッツの応答に於いてである。ライプニッツによれば、

---

[1] 例えば、佐々木能章氏はライプニッツがデ・ボス神父に宛てた書簡の中から 20 通を抜粋して翻訳したが（〈ライプニッツ著作集〉第 9 巻「後期哲学」に所収）、その際、「エコー」という言葉に〈註 40〉を当てて、次のように述べている。「実体的紐帯がエコーとして表現される最初の場面である。ライプニッツの意図がどのようなものであったかは必ずしも明確ではなく、むしろそのため解釈のイメージとして様々に扱われている。」（同書、182 頁）また後述の C. フレモンは端的に「メタファー」と呼んでいる（Frémont, p.241）。

諸モナドはこの実在化するもの（＝「実在的結合」）に影響するのだが、しかしこのもの自身は諸モナドの法則を何ら変えることはない。というのも、諸モナドから受け取る変化の一つ一つを、この実在化するものはいわば quasi エコーとして有しているからである。（ibid., p.495）

この「実在化するもの」即ち「実在的結合」がエコーを有しているのは、本質的 essentialiter にではなく自然的 naturaliter になのである、と云う。何故なら、神の力を以てすれば、諸モナドが与えないものを「実在的結合」に帰することも、反対に諸モナドが与えるところのものを「実在的結合」から取り除くことも出来るからである（ibid.）。

しかしながら、これだけ見てみると、何故に彼が〈実体的紐帯〉なるものを立てなければならなかったのか却って理解に苦しむのではないだろうか。既に彼は、デ・ボス神父との書簡の遣り取りの初期の段階で、「エンテレケイア entelechia は自分の有機的身体、つまり第二質料 materia secunda を取り替える」（ibid., p.324）と書き送っているのである。そして、ここで云われている〈第二質料〉とはとりもなおさず諸モナドの集合体である[2]ことを考え合わせるなら、上で見たような「エコー」による説明は、かつてデカルト派の自然学者ブルヒャー・デ・フォルダー Burcher de Volder に提示して見せた図式、即ち、物体が一性を有するのは、その物体の〈支配的モナド〉が、物体を構成する無数の〈従属的モナド〉の諸表象を自己に於いて判明に表象することによってである、という説明と何ら変わりがないようにさえ思われる。

'Echo' とモナド、そして紐帯

こうした疑問に答えるためには、まず 1715 年 8 月 19 日付の書簡に注目する必要があるだろう。この書簡に於いてライプニッツは、「モナドがそれ自身の蓄えから ex penu sua 全てを引き出す」（ibid., p.503）ことを改めて確認し、このようなモナドが無ければそもそも紐帯について考えることなど無意味である、と述べた上で、紐帯が実体的なもの substantiale でなければ複合実体を作ることは出来ない、と断言し、「エコーを反射する reddens 物体が作用の原理である。つまり紐帯は複合実体の作用の原理なのである」（ibid.）と述べている。

ここから取り出せる主張は、順々に挙げれば以下の四つであると考えられる。

（1）モナドが存在する、ということが紐帯について考察するための必要条件である。

（2）ライプニッツの云う紐帯は「実体的なもの」substantiale である。

（3）紐帯はエコーを反射する reddens ものである。

（4）紐帯は複合実体の作用の原理である。

ここでは先ず、本書簡でのライプニッツにとって「実体的」とは如何なる意味を持つのかを見出すために、（2）の主張から見ていくことにする。同じ書簡の続く箇所で、彼は「実体的」であるということについて二つの定義の仕方を提示している。一つは様態 modificatio でないものが実

[2] Cf. ibid., p.285

体的なものである、というもの。もう一つは、様態の源泉 fons modificationum が実体的なものである、というもの。そして後者の定義の仕方に導かれる形で、彼は次のように述べている。

> 実体的紐帯は……基体 subjecto の内に在るのだが、しかしそれは偶有性としてではなく、スコラ学者が言うところの実体的形相として、或いは様態の源泉として――この時にはエコーとしての在り方で――在るのである。（ibid., p.504）

ここで、実体的紐帯とエコーとの関係を考える上で、〈半偶有性〉semiaccidentia（ibid.）と呼ばれているものが重要な役割を果たすように思われる。これは「色とか匂いとか味とか」（ibid.）であり、またこの書簡の付録として収められている表には、「形象 species、諸実体の様態の集まり」（ibid., p.506）とされている。ライプニッツに言わせると、この 〈半偶有性〉は――〈半実体〉semisubstantia[3]（ibid., p.503.）、即ち単純実体から成る寄せ集めと共に――もしモナドしか存在せず従って実体的紐帯が無ければ、真ではあるものの単なる現象に留まるのである。換言すれば、実体的紐帯が存在して始めて、この〈半偶有性〉は「半」という言葉を免れる、即ち複合体[4]の真の偶有性 accidentia となることが出来るのである――要するに〈実体的紐帯〉は「様態の源泉」であり、「半偶有性」を真の偶有性たらしめるものなのである。[5]

次に、(1) と (3) についてまとめて見ていくことにしたい。その理由は、これら二つの主張から、「エコー」に関する或る重要な解釈が生じているように思われるからである。

その解釈とは、イヴォン・ブラヴァル Yvon Belaval[6]とクリスティアーヌ・フレモン Christiane Frémont[7]による解釈である。彼らによれば、「エコー」という言葉が現れることによって次のような三項図式が成立する。即ち、(i) 発信装置である諸モナド、(ii) 反射する壁である〈実体的紐帯〉、(iii) 反射によって実体化させられたものである「エコー」。フレモンが続けて述べるところによれば、モナドが与えられたとしてもそれだけでは単なる寄せ集めしか出来ない。「実体化されたもの」が生じるための十分条件は、〈実体的紐帯〉の内に探し求められるべきなのである。支配的モナドと複合実体が不可分であるとされているのはデ・フォルダーと往復書簡を交わしていた時と変わらないが、デ・ボス神父との往復書簡に於いては、支配的モナドが複合実体を形成するとは言わなくなっている、という違いがある。この違いは、〈支配的モナド〉が複合実体を構成するということが、そもそも論理的かつ形而上学的に不可能であることに由来している、とフレモンは主張する[8]。「というのも、支配的モナドは、その他の諸モナドと同じく、宇宙を一定の仕方で表出するのであって、それはその他の諸モナドよりもより判明に、つまりより完全なも

---

3 先の〈半偶有性〉と合わせて両者は〈半有〉semientia と称される（ibid.）。

4 ここで（また以下に於いても）「複合体」と言われているものは、諸モナド或いは（この直前で言われているように）単純実体から成る寄せ集めのことであって、〈複合実体〉のことではない点をここで申し添えておきたい。

5 ライプニッツが偶有性を様態と同一視している点については、GII, pp.457-458 を参照。Cf. 石黒、p.146

6 Belaval, pp.248-249

7 Frémont, pp.33-38

8 ibid., p.37

のなのだが……、支配的モナドはより判明に表出するに過ぎず、他の一切の表出の一性とはならないからである」[9]。

さらに言えば、支配的モナドは他の諸モナドに比べてより判明に表象するとはいえ、モナドである点に於いては他の諸モナドと何ら変わりがない。従って、支配的モナドと呼ばれるモナドといえども、モナドの寄せ集めの一要素に過ぎない訳であるから、支配的モナドが複合実体を構成するという事態は、或る集合の構成要素に過ぎないものが当の集合を構成する、という事態に還元されることになる。ところで、「或る集合の構成要素に過ぎないものが当の集合を構成する」とは何とも奇妙な事態ではないだろうか――「〈4〉が自然数全体の集合を構成する」或いは「あなたの右手の小指があなたの身体全体を構成する」と云うように。[10]

かくして、〈実体的紐帯〉という一つの壁がもたらされることによって初めて、諸モナドの共通の様態が取り出されることになる。ジル・ドゥルーズ Gilles Deleuze の表現を借りれば、「一緒になって響かせる〈反響〉をとりだすのである」[11]。以上が、物体的実体の一性は〈実体的紐帯〉にしか起因しないと云われる所以である。

この点を先に見た論点 (2) と合わせて考える時、この解釈は一見、どのようにして〈実体的紐帯〉が「様態の源泉」であるのか、という点を明示しているように思われる。即ち、諸モナドが個々別々に発する表象を〈実体的紐帯〉が反響することによって、それら諸表象を恰も波の音のように一まとまりのものとし、諸モナドと支配的モナドから成る複合体自身の表象たらしめる、という訳である。

反論

しかしながら他方、実体は自己の内に自発性を有しかつこの世界の全てを含んでおり、実体同士で影響を及ぼし合うことは無い、という彼自身の著名な主張[12]がある。また、「形而上学叙説」第 8 節に於いて、偶有性について、「その概念（＝偶有性の概念）が属しているところの主体に属し得る全ての概念を含んでいるとは云えない」と云い、アレクサンダー大王に属している「王」という性質を例に挙げて、この性質は主体から切り離されると或る個体を決定し得ず、同じ主語が有する他の性質を含んでいない、と主張する一方、同時期に認められたアントワーヌ・アルノー Antoine Arnauld 宛書簡（1686 年 7 月 14 日付）では、或る個体を規定する determiner ものは、その個体の全ての述語を含んでいなければならず、従って或る個体（例えばアダム）の一切の述語を含んでいる完足的 compléte な実体こそが当の個体を規定する、と主張されている（ibid., p.54）。

これらの主張を鑑みると、諸モナドは互いに独立し合っているのであるから、この期に及んで

---

9 ibid.

10 Cf. ibid.

11 ドゥルーズ、p.192

12 例えば Correspondance avec Arnauld; GII pp11-138、特に 1687 年 4 月 30 日付（ibid., pp.90-102）、及び 1687 年 10 月 9 日付（ibid., pp.111-129）を参照

諸モナドの表象のまとめ役であるような〈実体的紐帯〉を持ち出す意味がやはり理解できない、デ・フォルダーに対して為したように、支配的モナドと従属的諸モナドの表象の判明度の差で説明すれば充分ではないか、という反論が提起されるように思われる。

また、〈実体的紐帯〉を持ち出すことによって、却って複合体の個体性の在り処が分からなくなるのではないか、という疑問が提示されることも考えられる。というのも、支配的モナド―従属的諸モナドの図式のみであれば、複合体の個体性は、従属的諸モナドを判明に表象するが故に支配的モナドの側に在ると言えたのが、反射する壁である〈実体的紐帯〉を持ち出すことで却って、複合体の個体性の在り処を表象の判明性に求めることが出来なくなると考えられるからである。

〈実体的紐帯〉についての反論や疑念はまた、上記の（4）について、即ち〈実体的紐帯〉は複合実体の作用の原理であるという主張を考察することからでもさらに提起されるように思われる。何故そう考えられるのかを押さえておくために、ここでロバート・M・アダムス Robert Merrihew Adams の研究を参照しておきたい。

彼はその著作 *Leibniz; Determinist, Theist, Idealist*（1994）の中で、'Form and Matter in Leibniz's Middle Years' という章を設けているが、そこで 16 世紀後半スペインのイエズス会士にしてスコラ学者、フランシスコ・スアレス Francisco Suárez による〈実体的形相〉についての主張を引き合いに出しつつ、ライプニッツの〈実体的形相〉の説について考察を加えている。

ここでアダムスは、ライプニッツの〈実体的形相〉説を、それが「作用」efficient[13] 因的な働きを有しており基体の作用の原理である、というスアレスの主張に連なるものとして論じている。スアレスは〈実体的形相〉を「存在及び特性の泉」、即ち基体の作用の原理であると見做し、〈実体的形相〉の働きについて、例えば樫の木であれば、成長した樫の木に特徴的な生の形式を発展させかつ維持することにあると考えているという。ここからアダムスは次の二つの主張を説き起こしている。第一に、スアレスにとって、〈実体的形相〉は自らが属している実体に作用するものであり、故にその「作用」因的な働きは遍在的 immanent なものであるが、こうした遍在的な因果性は、ライプニッツにとっては、形而上学的にのみ実在的であるようなものであること。第二に、――ライプニッツにとって〈力〉の概念が殊に重要であることを指摘しつつ――スアレスの主張からすると、形相が「作用」因的な役割を有しているのは、〈実体的形相〉を有することが或る一定の力や傾向を有していることである、或いは有していることを含んでいる限りであると考えられるが、これはライプニッツの考えに相即的なものであること。[14]

以上のようなアダムスの主張からすると、「作用の原理である」とは、何ものか（例えば樫の木）を正に当の何ものかたらしめることである、ということになるであろう。このことを押さえた上で先に挙げた（4）を顧みる時、果たして〈実体的紐帯〉は本当に作用の原理たり得るのであるか、という疑念が頭を擡げるのではないだろうか。先に見たように、「エコー」という言葉を持ち出す場面で、ライプニッツは「諸モナドはこの実在化するものに影響するのだが、しかしこのもの

---

[13] アダムスは *efficient* とイタリックで記している。

[14] Adams, pp.310-311

自身は諸モナドの法則を何ら変えることはない」と述べていた。ということは、実のところ〈実体的紐帯〉には或るものを正にそのものたらしめるような力などない、従って〈実体的紐帯〉を作用の原理だとするのはおかしいのではないか、という帰結に陥るように思われるのである。

'Echo' と身体、魂――（1）身体なき魂＝反秩序的存在

冒頭にも述べたように、ライプニッツは 1716 年 5 月 29 日付書簡に於いて、デ・ボス神父に宛てて「魂もまた外的なもののエコーである」Etiam anima est Echo externorum[15] という言葉を書き送っている。この言葉を導き手として、前節の後半で取り出された問題に考察を加えていくことにしたい。

さて、エコーとは云うまでも無く何ものかの反響であることから、直前に引いた言葉は容易に『モナドロジー』（1714）中の次の言葉を連想させるのではないだろうか。

> ……どの単純実体も他の全ての実体を表出する様々な関係を持ち、従って宇宙を映す永遠の生ける鏡 miroir vivant なのである。（§56; GVI, p.616）

また続く第 77 節には、「魂（滅びることの無い宇宙の鏡）」（ibid., p.620）[16] という言葉もある。

ところで、同じ『モナドロジー』の第 62 節で、魂は特別に自分に属している身体を表出することで宇宙全体を表出する、と述べられており（ibid., p.617）、さらに第 70 節では、どの生物の身体もエンテレケイア（動物では「魂」）を持つと云われている（ibid., p.619）。こうした主張は、ライプニッツの考えに於いては目新しいものでは決して無い。魂は自己の身体を表出することで宇宙をも表出する、という主張は 1686 年の『形而上学叙説』中に既に見出されるものである（GIV, p.458）し、如何なる身体も魂乃至エンテレケイアを有するという主張もまた、1680 年代半ば――つまり『形而上学叙説』とほぼ同時期――に著されたと推測されている小論に於いて、以下に引用する文章によって既に打ち出されているのである。

> 精神 mens は身体 corpus から分かたれているか、それとも結び付けられているかである。分かたれている場合、それは神であり、結び付けられている場合、それは我々の魂 anima nostra である。その他に、「天使的精神」と称されるところの、我々よりさらに完全な精神も存在する。古代の人々は、これらの［天使的］精神も身体――我々のよりは精緻な――と結び付けられていると信じていた。もしこれが本当であるならば、我々の魂もまた、仮令それ自体では非物体的であるにしても、死によってのみ自己の粗大な身体から離れ去るものとして見ることが出来るだろう。自らに付加された身体を有さぬ被造物など無いのである。（LC,

---

[15] 出典箇所については本稿冒頭の「*始めに*」を参照のこと。ここで 'externorum' と呼ばれているものが何であるのか――魂が自己に固有のものとして有している身体のことなのか、それとも魂と対峙しているものとしての世界全体のことなのか――を、ライプニッツが全く規定していない点は留意しておかなければならないだろう。

[16] 括弧書きの文言はライプニッツ自身によるものである。

pp.284-285; [ ] は本稿筆者による補足）

被造物たるものは、仮令天使であろうとも身体を有する、というこの主張は、その後上記で見たように、機会ある毎に、彼が死を迎えるまで唱えていくものなのである。

しかし、先に見たような、実体は自発性を有しかつこの世界の全てを含んでいるという彼自身の主張[17]を知る人なら、彼にとっては魂乃至モナドに身体なぞ必要ないのではないか、何故「自らに付加された身体を有さぬ被造物など無い」と云わなければならないのか、と問うことであろう。これに対してライプニッツの側から先ず提出されるであろう反論として、神と被造物との区別に基づくものが予想される。実際彼は、1706 年 3 月 11 日付のデ・ボス神父宛書簡に於いて次のように主張している。曰く、身体を有さない存在はつまり受動性を一切有さない存在であり、従って純粋現実態 actus pures であることになるが、しかしそうするとそれは創造主たる神であるということになるが故に、被造物は身体を有さざるを得ないのである[18]、と。

一見すると、全能なる神と有限な被造者、という既存の教義に乗っかったに過ぎない、甚だ恣意的な回答に過ぎないように思われよう。しかしライプニッツ自身にとっては、この回答は恣意的であるどころか、或る確信に満ちたものでさえあったのではないだろうか。――というのも、例えば 1704 年 6 月 30 日付マシャム夫人 Lady Macham 宛書簡に於いて、彼は次のように述べているのである。

> あなたは次のように指摘されている、つまり、……魂が充足しているなら器官など必要ないではないか、と。それに答えて申し上げるに、もし（例えば）カエサルの魂が自然の内で単独でしか存在しないのであれば、事物の創造主はそれに対して器官を与えずに済ませることが出来たであろう。しかし他ならぬこの創造主が、無数の存在者を、それもその器官の内に互いを含んでいるような存在者を創造することを望み給うたのである。我々の身体はそれ故、現実に存在するに相応しい無数の被造物に充ち満ちた一種の宇宙なのであって、もし我々の身体が有機化されていなかったならば、我々の小宇宙は持ち得たはずの完全性を全く有していなかったであろうし、大宇宙にしても今あるような大いなる豊かさは無かったであろう。（GIII, p.356）

さらに、この書簡とほぼ同時期に〈学芸著作史〉（Histoire des ouvrages des Savants）に発表した『形成的自然と生命の原理についての考察』[19]（1705 年）では、結末直前に次のように主張する。

---

17 註 11 を参照

18 Cf. GII, p.325

19 この論文を執筆したのは、マシャム夫人の父であるラルフ・カドワース Ralph Cudworth を初めとするケンブリッジ・プラトニスト達の生命論、就中（ここに見た論文の題名にもなっている）〈形成的自然〉なる説に触発されつつ、それに反論せんと考えたためだと言われている。なお、その詳細については、例えば E. カッシーラー『英国のプラトン・ルネサンス』（かなり古い文献であるが）などを参照されたい。

> ……私は自然的に全く分離された魂とか、身体から一切離脱した被造精神とかは存在しないと考える。……被造物が物質から解放されて自由になったとしたら、それは同時に普遍的結合からも解放されることになり、いわば一般的秩序からの脱走兵になってしまう。（GVI, pp.545-546）

これらの引用文から明らかであるように、彼にとっては、身体を持たぬ魂といったものは秩序に反する存在なのである。

しかし、そもそも何故身体を持たぬ魂は秩序に反しているのであるのであろうか。「他ならぬこの創造主が、無数の存在者を、それもその器官の内に互いを含んでいるような存在者を創造することを望み給うた」からであろうか。けれどもそれでは、先に提示した「全能なる神と有限な被造者、という既存の教義に乗っかったに過ぎない」主張であるという疑惑が再び頭を擡げ、議論が水掛け論と化してしまうのではないだろうか。――それを避けるためには、先に見たマシャム夫人宛書簡に現れる〈完全性〉という語に注意を向けるのが良いように思われる。

ライプニッツは『モナドロジー』に於いて、単純実体が無数にあってそれらが唯一の宇宙の様々な眺望となっていると語った（§57; GVI, p.616）後、それが「出来る限り多くの完全性を得る方法なのである」と述べる（§58; ibid.）。さらに（年代は遡るが）『24 の命題』（1690 年代）に於いて、次の命題が打ち出されている。

> ……完全性は実在する。何となれば、〈完全性〉とは実在性の量以外の何ものでもないのだから。（C, p.534）

何故〈完全性〉は実在するのか。ライプニッツは、自己の本質乃至実在性の量に応じて実在することを要求しているものを「可能なもの」と呼ぶのであるが[20]、「可能なもの」が全て実在するようになる訳ではない。というのも、それらの中には相互に非整合的なものもあるからである[21]。従って、「可能なもの」は互いに実在を目指して争うこととなり、最も多数なもの、或いは可能なものたちの最大の系列 series maxima がその争いから帰結するに到るのである。それ故に、「完全性は実在する」。

けれども、もしこうした〈完全性〉、或いはそもそも「可能なもの」が神によって創造されるものならば、先に掲げた疑惑は解消されえないであろう。然るに、彼にとって「可能なもの」とは神の創造物ではない。創造されるのはあのアダム―つまり『創世記』に描かれているアダム――であり、あのアダムが神によって現実存在へともたらされたのであって、無数にある可能なアダムは、あくまで「可能なもの」のままに留まるのである[22]。

また、〈完全性〉も「可能なもの」と同様に神の創造物ではない。先に見たように、〈完全性〉

---

20 Cf. GVII, p.304

21 所謂「共可能性」に関わる箇所であるが、本稿ではその詳細には立ち入らないことにする。

22 GII, pp.54-55

とは実在を要求する「可能なもの」達の争いから帰結されるものであって、彼にとって神の創造とは、「可能なもの」達の系列の中で最も完全であるような系列を現実存在へともたらすことなのである。

かくあってみれば、或るモナドがもし身体を持たないとすると、そのモナドは他のモナドと共に実在の量を最大化することがなく、従ってそのモナド自身は全く〈完全性〉を有さないことになる。換言すれば、或るモナドは他のモナド達と関係し合って初めて〈完全性〉を有することが出来る、即ち、現実存在へともたらされ得るのである。

ライプニッツの主張が既存の教義に合わせるための恣意的なものではないこと、そしてその主張が、或るモナドは他のモナド達と関係性を有することが不可欠であると考えられている点に由来すること、――このような解釈は〈第一質料〉materia prima についてのフレモンの解釈[23]によってさらに補強されるように思われる。ライプニッツによれば、〈第一質料〉は単純実体の受動的な側面であって、能動的な側面である〈第一エンテレケイア〉と合わさって初めて完足的な実体即ちモナドとなるのであり、従ってこの両者は不可分なものなのであるが、フレモンの解釈では、〈第一質料〉とはモナド自身の位置、即ち自己と他のモナドたちとの関係を打ち立てる制限の内的原理なのである[24]。

Echo と身体、魂――（2）秩序

しかしここまで辿ってきても、未だ次のような疑念が提起されるであろう。曰く、確かにモナドが単独にではなく互いにまとまって存在していることを認め、また魂と呼ばれるモナドが自己に固有の身体を有するという言い方を認めるとしても、だからと言って〈実体的紐帯〉を持ち出す必要は無いのではないか。個体概念の説、或いは『弁神論』第 3 部での人間の創造についての説[25]からすれば、或るモナドは別の一定の諸モナドを自己に固有の身体として特別に表象するよう予め設えられていると考えられるのではないか、と。

そこで以下では、「エコー」という言葉が用いられている別のテキストを考察することで、上記の疑念に答えていくこととしたい。そのテキストとは、1687 年 4 月 30 日付アルノー宛書簡で現れる、各々バラバラに配置され、別個に自分のパートを演奏しているような音楽家達のバンド

---

23 Frémont, p.117

24 とはいえ、このフレモンの解釈がそもそもライプニッツの云う〈第一質料〉にとって妥当なものであるかどうかの吟味は必要であるように思われる。というのも、ライプニッツは或るところでは〈第一質料〉を「原初的な受動力」vis passiva primitiva と規定したり（例えば *De ipsa natura*(1698)§12; GIV, p.512）、また別のところで、そこから抵抗 resistentia と惰性 inertia が生じると考えている（例えば GIII, p.260）ことからも分かるように、自然学的乃至物理学的な概念としても捉えていることから、上記のようなフレモンの解釈で打ち出されている、他のものとの関係の基礎となるものである、という主張が、〈第一質料〉についてライプニッツ自身が与えている言辞と、一見すると合致しないようにも思われるためである。ライプニッツの述べる〈受動〉概念の内実を改めて検証すると共に、〈力〉vis 概念について、物理学的規定以外の規定で捉えることが出来るのかどうか、また出来るとすればどのような規定が与えられるのか、こういった点を今後検討していく作業が必要となるであろう。この作業については今後の課題としたい。

25 同部第 397 節でライプニッツは、人間の魂は理性を予め備えられており、それに固有の身体が人間の姿を取るように決定されることで理性が発現する、という説を展開している。（GVI, p.352）

乃至コーラス、という譬え話（GII, p.95）と、それからもう一つ、『理性に基づく自然と恩寵の原理』（1714）第 4 節である。

アルノー宛書簡での譬え話は、実体は各々他の諸実体に影響されずに自発的に作用しており、それにも拘らず実体相互の作用が一致し合っている、という主張を比喩的に説明するために持ち出してくるものである。ライプニッツはこの譬え話をもう一歩進めて、こうしたコーラスの一つにいる誰かが、自分の属しているコーラスについては歌声を聞くことしか出来ず、別の或るコーラスについては歌っている姿を見ることしか出来ない、という仮定を立てている。そうすると、この仮定の下では問題の人は以下のような習慣 habitudes を持つかも知れない、と彼は考える。即ち、

> 想像力の助けもあって、自分が属しているコーラスより寧ろ相手方のことを考えるようになり、自分の属するコーラスについては、相手方のエコーである、としか見做さないようになるかも知れない……（ibid.）

比喩が用いられている場面から、コーラス全体を一つの実体と見做し、或るコーラスに属している人云々はあくまで仮定に過ぎないと見做す方が通りが良いように考えるかも知れない。しかしそう考えるのであれば、単独で歌っている人間が個々別々にいて、お互いに聞こえないにも拘らず全体としてコーラスを成している、という比喩を用いる方がより説得的ではないだろうか。ここはやはり、別のコーラスのことを考える者と、別のコーラスのエコーであるところのものとはそれぞれ異なって存している、と考える方が良いように思われる。

『モナドロジー』第 63 節で、モナドに属している身体が有機的 organique なものであることを主張しつつ、ライプニッツは次のように書き記している。

> ……というのも、全てのモナドは自己の流儀で宇宙の鏡 un miroir de l’univers であるのだし、また宇宙は完全な秩序の下で規則立てられているのだから、表現しているもの représentant、換言すれば魂の表象、詰まる所は身体――それに従って魂に於いて宇宙が表現されるところのもの――の内にも、秩序がなければならないことになる。（GVI, p.618）

モナドは自己の視点から宇宙全体を表現する――これが「宇宙の鏡」という言葉の意味である――が、その表現に当たる表象が他ならぬそのモナド固有の身体であるということは、或るモナドがわざわざ別の諸モナドを自己の身体であると表象するように予め誂えられているのではない、ということを意味するであろう。

ところで、身体が全宇宙を表現するのは、物質間に存する関係一切によって可能となる。そして今し方見たように、ライプニッツにとっては宇宙にも、魂の表象である身体にも等しく秩序が存している。しかし彼によれば、物質間に諸関係が既に存しているからといって秩序もまたいわば自動的に現れてくるのではない。それどころか、魂が無ければおよそ秩序などは存在し得ない

のである。1706 年に、自己の庇護者であるゾフィー侯妃 Princess Sophie に宛てて書き送った書簡はそのことを良く物語っている。

> ……自然は実際、単独で一切の印象を一つにまとめはするのだが、魂が無ければ、物質が受け取った諸印象の秩序というものは解けぬままであり、従ってそれら諸印象も混乱したままなのである。物質の識別可能な各点は、やはり識別可能な他の点とは全く異なる運動を有している。そして運動というものは、先立つ一切の諸印象から構成されているものである。然るにこの印象はといえば、運動を構成する諸印象同様単純なものであって、そこに構成は見出されないのである。とはいえ完全な結果は常に原因を表現しなければならないのであるから、物質以外のものがなければならないことになる。そして先立つ諸印象が区別され保存されるところ、そこに魂は存しているのである。……かくなる訳で、あらゆる魂にはそれに対応する有機的身体が備えられているのである。（GIII, p.570）

Echo と身体、魂――（3）同一性と記憶、個体性

魂が在ることによって秩序が生じてくるが、またそれと同時に同一性 identité も生じてくる。ライプニッツは『人間知性新論』第 2 巻第 27 章第 4 節では「有機化乃至形成化 configuration は、持続してある生命原理――私がモナドと呼ぶところのもの――が無ければ、数的に同じ idem numero であったり同一の個体であったりし続けるようにするには不十分である」（GV, p.214）と述べ、続く第 5 節では、「植物や動物にもし魂が無ければ、それらの同一性は見かけ上のものでしかない」（GV, p.215）と述べている。

しかし何故そう言えるのか。第 4 節で彼は、魂を有さないものの例としてハンガリーの鉱泉に浸された蹄鉄の例を挙げつつ、こう説明する。曰く、鉱泉に浸された蹄鉄は、形はそのままであるけれども構成しているものの内部配置は感知できない仕方で入れ替わってしまっている。しかも形状というものは、或る基体から別の基体へと移動しないとはいえ、偶有性ではあることから、当の蹄鉄の同一性は見かけだけでしかないのである、と。

この説明から、真に同一性が言えるためには、内部の構成要素の変化に拘らずそのものの同一性を保証するものが別に必要であることが分かる。しかしそれは、上の説明からするとそのものの形状には求められない。すると一体何処に求めれば良いのか。

ここで、『理性に基づく自然と恩寵の原理』第 4 節に見られる次の言葉を参照したい。

> モナドが良く整えられた器官を有しており、その器官が受け取る諸印象に、従ってそれら諸印象を表現する表象に輪郭の鮮明さが存する場合には、感覚 sentiment、換言すれば記憶 mémoire を伴う表象、つまりそれの何らかのエコーが、機会があれば再び聞こえてくるよう長期間に亙って留まっているような表象、にまで至ることができる。このような［表象を有する］生命体は「動物」と呼ばれ、またその［生命体の］モナドは「魂」と呼ばれる。（GVI, p.599; ［ ］は本稿筆者による補足）

ここで「記憶」mémoire という言葉が「エコー」に結び付けられて用いられている点に注目したい。『モナドロジー』第 26 節でライプニッツは、記憶は魂に、理性 raison に良く似た一種の連結作用 consécution を与えると述べ、一度棒で打たれたことのある犬が、以後棒を見ると怯えるという例を挙げている。ここで理性と区別されているのは、記憶は理性と異なり永遠真理の認識に至ることが無いからである[26]。しかし同時に、記憶は「習慣」habitude とも区別されるべきものである。『真理の探究』で記憶と習慣とを同一視するマルブランシュに対して、ライプニッツは「記憶には別のものが存する。思惟することの容易さを有するだけでは足りない。かつてそれを思惟したということを判断しなければならない」[27] というメモを残している。過去の活動乃至働きを再認するような思惟を以て過去へと舞い戻る点が、記憶を習慣から分かつのである。[28] ということは、「過去に起こった事が他ならぬ私に起こった事であり、それを経験したのは他ならぬ私自身であり、今ここにいる私と当時の私とは同じ私である」と判断せしめ、かつ実際に同一の私たらしめているのは、記憶の働きに因るものではないだろうか。

そしてこれら記憶や感覚が、先に見た秩序と同様に魂無しでは成立し得ない、とライプニッツが考えていたことに注意を払うべきであると思われる。初期の論考で、彼は「精神が無ければ、運動無しに一瞬間以上持続するような傾向力 conatus は存在しない」と述べて、次のように続ける。

> 物質とは瞬間的な精神、即ち記憶を欠いた精神である。何故なら、物質は自分の傾向力とこれに反する他の傾向力とを一瞬間以上保持し得ないからである。この二つ――作用と反作用、つまり比較と調和――が感覚や意欲や苦痛といったものには必要であって、この二つ無しには感覚はあり得ない。それ故、物質は記憶を欠き、自己の能動・受動の感覚を欠き、思惟をも欠いている。（GIV, p.230）

かくして、次のような推測が成立すると考えられる。――傾向力なりモナドなりをまとめるものが在って初めて感覚が生じ、また記憶が生じて同一性を打ち立てることができるようになり、また表象も秩序立ったものとなることができる。そうしてこれらのことを可能にする「まとめるもの」こそが、〈実体的紐帯〉に他ならないのであり、この意味で「作用の原理」と見做されていたのではないか。そして「エコー」という言葉は、〈実体的紐帯〉によって生じた感覚や記憶と重ね合わせて捉えるべきではないか、と。

最後に、未だ残されている身体の個体性の問題を簡単にではあるが片付けておきたい。ライプニッツにとっては魂も身体同様、自己の法則に従って作用している[29] ことをここで想起すれば、ここまで辿ってきたことから身体の個体性について次のように推測できるのではないだろうか。

---

[26] Cf.『モナドロジー』§§29-30; GVI, pp.611-612

[27] Robinet, p.171

[28] ここで扱った記憶と習慣の関係については、Naert、殊に pp.46-47 を大いに参照したことをここに記しておく。

[29] 註 10 を参照。

――身体が受け取った諸印象の一切を、魂は自己の則っている法則に従いつつ区別し保存する。そうすることによって、（イ）或る諸印象が或る魂の下にある身体の受け取ったものである、ということが明示的となると共に、（ロ）それら諸印象を保存することで、或る運動もまたその魂の下にある身体のものであることが明示的となるのである。つまり、魂は身体が受け取った諸印象を自己の法則に従って区別し保存することで、身体に個体性を与えているのである、と。

参照テキスト　※翻訳も含む。

【一次文献】

- C. I.Gerhardt(ed.), *Die philosophischen Schriften von Gottflied Wilhelm Leibniz,* Berlin, 1879(G)
- L. Couturat(ed.), *G. W. Leibniz, Opuscules et inédits,* Paris, 1903(rep., Hildesheim : G. Olms, 1988)(C)
- A. Robinet(ed.), *Malebranche et Leibniz, Relations personnelles,* Paris, 1955
- *The Labyrinth of the Continuum, Writing on the Continuum Problem.* Ed and Tran. R.T.W. Arther. New Heaven and London : Yale University Press, 2001(LC)
- 佐々木能章訳「デ・ボス宛書簡」（〈ライプニッツ著作集〉第 9 巻「後期哲学」に所収）、東京、工作舎、1989 年

【二次文献】

- Robert Merrihew Adams, *Leibniz; Determinist, Theist, Idealist,* New York, Oxford University Press, 1994
- Yvon Belaval, *Leibniz, initiation à sa philosophie,* Paris, J. Vrin, 1961
- Christiane Frémont, *L'Être et la relation : Lettres de Leibniz à Des Bosses,* Paris, J.Vrin, 1981(2ème éd. : 1999)
- Émilienne Naert, *Mémoire et conscience de soi selon Leibniz,* Paris, J.Vrin, 1961
- 石黒ひで『ライプニッツの哲学――論理と言語を中心に』東京、岩波書店、2003 年（初版：1983 年）
- リタ・ヴィドマイヤー「ライプニッツの中国学――昨日と今日――」『思想』所収、東京、岩波書店、2001
- ジル・ドゥルーズ『襞――ライプニッツとバロック』宇野邦一訳、東京、河出書房新社、1998 年

（やまぐちひろひと　現代思想文化学・博士後期課程）

Composed Substance and ‘Echo’
—The consideration on the *vinculum substantiale*—

Hirohito YAMAGUCHI

Leibniz used the word ‘Echo’ in the letter to R.P. des Bosses at 29.4.1715. This word is a simple metaphor? He regarded *vinculum substantiale* to *fons modificationum,* and it can take modes common to monad by *vinculum*.

But do we need *vinculum* actually, after all? Where is individuality of composed substances? Can *vinculum* be the ‘principle of action’?

We need *vinculum* actually. For (1)if a monad wouldn’t have the proper body, it wouldn’t have perfection, therefore it wouldn’t be created by God. (2)If *vinculum* wouldn’t be there, then the order of impressions and memories wouldn’t be there, consequently senses, and the identity wouldn’t be there too. It may be inferred from these reasons that: We have memories when something to unify ‘conatus’ and monads is there. Moreover it brings about senses, the order of impressions and the identity by memories. It may be inferred also that something to unify ‘conatus’ and monads is *vinculum substantiale*, and so *vinculum* is considered to be the ‘principle of action’, So we should take ‘echo’ as sense or memory.

「キーワード」
実体的紐帯、エコー、完全性、秩序、記憶